

空のっぐく風景

B O R D E R L E S S S K Y

文・大庫直樹

第2回

しまなみを自転車で駆ける

～今治から尾道へ70キロの旅～



Illustration: Katsube Tomomi

日本の風景の中で、ここぞ日本とを感じる場所はどこか、そうした問いに対して、私は瀬戸内と答えてしまう。京都や奈良も日本情緒あふれる街並みが続く。でも、それは街並みであって自然の景観とは違う。内海特有の穏やかな波間に、光が反射し、まるで日本庭園のように丸みを帯びた島々が点在する。その光景こそ、ふたつとない日本の原風景のように、私には思えてならない。

そうしたしまなみの風景を愛でながら、今治から尾道につづく本四架橋と一般道路を駆ける自転車大会が2年に1度、偶数年に開催される。「サイクリングしまなみ」がそれだ。

「サイクリングしまなみ」は、レースではない。ファン・イベント、つまり楽しみながら参加することを目的とする大会だ。そのため、参加者の体力と経験に合わせて、コースも7つある。最強のコースは、今治から尾道まで走り戻ってくる140キロのコース。一方でファミリー向けに今治から最寄りの大島に向かい往復する30キロのコースもある。ただ、一番人気は、今治から尾道へ、もしくは尾道から今治へ向かう片道の70キロのコースだ。

2018年の大会も参加可能人数を応募者が上回った。参加したくても運がよくなないと参加できない。事実、私も応募したが敢え無く落選。涙をのんだ。それだけ、普段、自転車で走ることができない本四架橋部分を、風に煽られても渡り、高い位置から眺める瀬戸内の景色は素晴らしい。文字通りスカイブルーの空とターコイズブルーの海が溶け合うような水平線。その中に自分自身も吸い込まれていくような錯覚をついつい覚えてしまう。

私が運よく参加権を得られたのは2016年のことだ。今治から尾道への片道70キロのコースに参加することができた。

大会の前日は尾道に宿をとった。長丁場70キロの道のりに耐えられるように炭水化物を多めに摂り、そして、早く寝て、朝3時半に起床。尾道駅前からスタート地点の今治へ、暗闇の中、専用シャトルバスで移動することになる。

今治のスタート地点の少し手前に準備基地があって、そこで東京から送ったGiantの愛車をピックアップ。輸送のため外してあったペダルをつける。まだ秋とはいっても早朝は寒く手先がうまく動かない。ハンドルをぎこちない手つきで調整していると、ようやく空に赤みが掛かる。少しずつハイテンションになる。

スタートは、完走予想時間ごとに分かれてグループになる。私は慎重に4時間と想定。時速17.5キロということなので、決して速いグループではない。あたりを見渡せば、私と同じくらいの年齢と思しき方々が多い。ファン・イベントならではだ。

先頭のグループがスタートしてから15分経ってから、ようやく私のグループも出走。スタート地点での温かい応援を聞きながら、つま先でゆっくりとペダルを踏みだした。高速道路の今治ICのゲートをくぐる。空は薄いブルーグレー。

はじめは、団子状で前後左右の自転車に気をつけながら走る。それでも、5分もすれば団子状だった集団はほぐれていく。

最初の本四架橋、来島海峡大橋を登り始めるころには、自転車が数珠つなぎのように一本の線になっていく。緩やかに曲線を描きながら、海上部分に向かってつき進む。橋脚を越えれば、視界は一気に広がり瀬戸内海が現れる。後ろから来る自転車に注意しながら、ペダルを踏むのを止め、しまなみの光、風、音を体で感じる。自分自身のひとつひとつの細胞が活性化されていくような気がする。「サイコー」と心の中で絶叫する。

コースの途中には数か所、リフレッシュのためのエイドステーションが設けられている。今治から尾道に向かうコースには、ほぼ中間点の瀬戸田、因島の万田発酵の工場、ゴール近くの向島にある中学校で一休みすることができる。一休みするだけでなく、地元名産でエネルギーを充填する場所でもある。もみじ饅頭、八朔ゼリーなど、おなじみの名産物をいただき、疲れを癒す。

実は、大島、伯方島、大三島、生口島に渡るまでは本四架橋を通してコースは進む。ひとたび登れば平坦な道だった。しかし、生口島で高速道路をおり、一般道を進むことになる。人家がすぐそばにあり、人々の応援も聞こえてくる。問題は、島と島をつなぐ橋。海を渡るには、傾斜のきつい坂道をその都度登ることになる。変則ギアを入れ替えても、決して楽チンとは言えない。疲れては目線が前輪の先を眺めるようになる。コースを示す道路上の青いラインには1キロおきにゴールまでの距離表示があり、それを探そうと視線が向かい始める。

最後のエイドステーション、向島中学校で太鼓による応援を聞き、渡し船に乗り込めば、尾道の倉庫群の中にあるゴールまでほんの僅か。そのころには南中する太陽の日差しを浴びて、海面がキラキラと輝いている。気づかぬうちに日焼けもしたようで、かすかにヒリヒリと感じ始める。でも、それが70キロのコースを走り抜けようとする今の、達成感であり、快感でもあった。

今治から尾道まで丁度4時間の旅。スタートからゴールまで、空はグラデーションのように変化し、ブルーグレーからスカイブルーへ。今では島々に橋が掛かり、自動車や自転車でも行き来ができるようになった。やろうと思えば歩いてでも渡れる。その昔は船での往来だった。移手段は変われど、しまなみを越えて人々が行き来してきた。それを肌で感じる事ができる大会だった。



大庫直樹 (おおご なおき)

経営コンサルタント。1985年にマッキンゼー・アンド・カンパニーの東京オフィスに入社。20年間の勤務の後、2005年にGEコンシューマー・ファイナンス株式会社に入社。その後、2008年にルートエフ株式会社を設立し、代表取締役を務める傍ら、金融庁の参与、広島県の特別参与としても活躍。